「うた」について
20260711

身近な歌から→不思議な世界に誘い込まれる

時間→客観的に流れる時間と体内時計＝体感としての時間

旅を歌った歌が多い→北へ

山男の歌、四季の歌、この道・・・

ミセスグリーンアップル

サボテンの花、また逢う日まで

ふるさと、朧月夜、里の秋→唱歌
琵琶湖周航の歌→懐かしさ、郷愁、故郷への愛

プログレス（スガシカオ）、アンパンマンのマーチ

陽水の氷の世界、フォークソング→拓郎

心の旅、明日に架ける橋

いろんなことを思い出す、連想させる、励まされる

小室節→小諸の民謡→モンゴル辺りからの渡来の民の望郷、郷愁の思い

馬の飼育から馬方へ→旅を栖とする→小室節を謡いながら

古代日本→文字なし→神話、歌謡→古事記（稗田阿礼→記録）→万葉集→和歌→俳句

謡曲、能→死者との対話、内省、郷愁、望郷

言葉、詩、メロディー、リズム

子守歌→子どもの悲しみ、暗さ→短調

七五調→日本の古来からの、心を伝えることばの形

歌で自分の気持ちを伝える→世の中の不条理→陽水

北へ向かう→悲しいことつらいこと→より悲しいところへ→泣く

流行歌（昭和歌謡、演歌）→短調

紅白歌合戦が最近面白くなくなった

音楽は半分は見るもの→演奏する人の動作、指揮者の動作から音楽が伝わる

陽水は歌詞がいいが、拓郎はパフォーマンスで皆を乗せる

英語の歌詞やラップなど

歌詞やメロディーよりもパフォーマンス

ある価値観で結ばれている→宗教音楽

共通の感情を喚起する→高揚感

ヨイトマケの唄、オンブラマイフ（ヘンデル）

歌を、曲、メロディーを聴くと涙が流れることがある

浜辺の歌→郷愁、ノスタルジー

感情の深いところで共感する

死の陰がある

最近は共感性がなくなりバラバラになっていく感じがある→絶望感

好きな曲、歌→自然と心に浮かぶ

低学年→歌う、高学年→聴くようになる

アンパンマン→子どもの歌詞の意味ではない→深い

外国の歌→メロディーだけでもいいと思う

人が感動するところを心得て歌詞をつくる

シンガーソングライター→職人、プロ

メロディーなのか歌詞なのか

歌詞ではなく感覚に訴えてくるメロディー

言葉は脳、メロディーは身体

はじめに言葉ありき？→歌会始

人の心を種として、よろす言の葉とぞなりける（貫之）

心の中に湧きおこる思い→言葉以前のもの

心の動き→うたになる→表現

言葉にメロディー、リズムが乗ることで心の琴線に触れてくる

詩は読むものではなくうたうもの

音楽の原点→太鼓→心臓の鼓動に似ている

ジョン・ケージ（作曲家）→人工の無音室に入った経験

歌→時間を超えられる→記憶の中にある

外からは何も聴こえないが、自分の心臓の鼓動、血液の流れる音、神経の伝わる音

自分という自然の音が聴こえてくる→音楽の起源

ベートーヴェン第5番のテーマ「汝の内なる声を聴け」と重なる

未来への希望を歌う

生命の音が聴こえてくる

感情の共感は人を一つの方向へ向ける危うさも孕む